

「どんな境遇にあっても満足することを学ぶ」

ピリピ4：10—12

堀田修一 22・3・13

I 「乏しいからこう言うのではありません。私は、どんな境遇にあっても満足することを学びました」：11。

1. これは口先だけの言葉ではなかった。使徒16章で、パウロとシラスが福音の為に捕えられ、鞭打たれ、投獄された事が記されている。足には足かせをかけられ、彼らの肉体は、ひどい状態にあったと思われる。しかし、そこで、「真夜中ごろ、パウロとシラスが神に祈りつつ賛美の歌を歌っていると、ほかの囚人たちも聞き入っていた」（：25）とある。神の救いと共におられる神を喜び「どんな状況にあっても満ち足りる」姿がここにある！Ⅱコリント12章でも同様。非常に辛い肉体のとげ（病）を持っていたが、その中で正直に神に祈り、主から「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現れるからである」（12：9）と語られ、弱さ、侮辱、苦悩、迫害、困難があっても、主によって満ち足り喜び、「弱いときこそ、私は（主の支えがあり）強い」と語っている（12：10）。また、テモテにも、語っている。「満ち足りる心を伴う敬虔（神を恐れ敬う心）こそ、大きな利益（神の祝福）を受ける道です」（Iテモテ6：6）。これは、高価で尊い心。満ち足りる心を持つ人は、ある意味で、すべてを持っている幸いな人。多くの物を持って、欲が深く、感謝もなく、不平の多い人は幸いではない。持ち物が少なくても、神が下さる一日を、神と人に感謝して生きる人は、真に幸いな人。欲張り、多くを持ち過ぎて（欲張り欲しいと願う物がすべて家に届くなら）倉庫を増やしても管理し切れない。※ある日、その真理を教えられた。それよりも、人と比べる事を止め、真に必要なもの、一つ一つを神からいただいている恵みを数え、何一つ当然と思わず、心から感謝し、正しく用い管理する人は幸い。主の再臨の時、神の報いがある。主の日に問われるのは、「あなたは、私があなたに預けた物を神と人々の為に用いましたか?」。この時、パウロはすでに年老いており、若いテモテに語っている。周囲の状況に左右されない満ち足りる心を学ぶ必要がある。主は、語られた。「あすのことまで心配しなくてよいのです」（マタイ6：34）。あす以降の事を心配し過ぎてはいけない。自分の身に振り掛かる出来事にうろたえさせられない資質を祈り求め、会得するなら幸いである。もし自分がどうにもできない状況に留まらなければならないとしても、それに圧倒されないように祈りたい。辛い状況によって、神が自分を愛しておられるかおられないかを判断してはならない。神は心から私達を愛しておられる。状況がどうあろうとも、それらに振り回されない平安を神は与えて下さる。

2. 「学びました」は大切なみことば。パウロは主を信じ救われ、すぐに、「どんな境遇にあっても主によって満足する、満ち足りる事」を会得したわけではない。「学びました」とは、色々な辛い経験、試練、境遇の中で、環境の奴隷になり、不平不満に満ちる人生ではなく、どんな境遇の中でも、主の恵みを数え、感謝し、すべてが神のご支配、御手にある事を認め、すべてを益にして下さる事を認め、主にあっても満ち足りる秘訣を学び続けた。これは、私達への慰め、励ましのみことばである。

Ⅱ「私は、貧しくあることも知っており、富むことも知っています。また、満ち足りることに
飢えることに、富むことに、乏しいことに、あらゆる境遇に対処する秘訣を心得ていま
す」：12。

1. 貧しさの中で不平や心配を持たないことができるだろうか。自分の仕事から十分な報酬
が得られなくなった時、また、苦しい状態に追いやられた時、主の救いの恵みと主を喜び満ち
足りた心を持てるだろうか。忍耐を強いられ、心に傷を負わされ、侮辱され、肉体に痛みを感
じながら、愛する人々が苦しんでいるのを見ながら、敬虔な信仰を貫くことは、決して簡単な
事ではない。人生で大切な学びの一つは、苦しみに直面しながら、ねたむ心を起こさず、不平
不満や苦々しい恨みの心、心配不安の心を抱かない秘訣をイエス様によって（自分の力では無
理）体得する事。パウロは、多くの試練、迫害、侮辱、苦痛を経験したが、それらに打ち負か
されなかった。それは、彼が、特別に強く、スーパーマンだったからではない。彼は正直に、
こう言っている。「あなたがたのところに行ったときの私は、弱く、恐れおののいていました」
Ⅰコリント2：3。この御言葉は、私達への励まし、慰めである。パウロは、例外の人ではな
い。私達と同じ弱さを持つ人。そのパウロが、どのようにして変えられて行ったのか。それは、
次の御言葉でわかる→「私たちがアジアで会った苦しみについて、ぜひ知っておいてください。
私たちは、非常に激しい、耐えられないほどの圧迫を受け、ついにはいのちさえも危うくなり、
ほんとうに、自分の心の中で死を覚悟しました。これは、もはや自分自身を頼まず、死者をよ
みがえらせてくださる神により頼む者となるためでした」Ⅱコリント1：8，9。私達も、信
仰を持った後もまだまだ自分に頼り、神に心から抛り頼む事をしていない面がある。信仰生活
の訓練とは、神に抛り頼む事を学び続ける事である。※ルカ21：21では、身を守る為「逃
げなさい」とある。逃げる事が必要な時も。

2. 逆の面もある。「富むことも知っている」と言われている。豊かさや上手く行っている状態
の中で神への純粋な信仰、心から神に栄光を帰す謙遜な心を失わない事も、非常に難しい。少し
でも豊かになり、自分の力で稼いだ、自分ですべてのものを操作できると誤解し思い上がり、
人は与え主の神を忘れ始める。むしろ、苦しい時に、神を求め、神に抛り頼む人は多い。苦し
みに会うと神に心から祈り始めるが、上手く行き始める時、神を忘れ易いのが私達の弱さであ
る。与え主を忘れないように祈りたい。

Ⅲ「あらゆる境遇に対処する秘訣を心得ています」

1. 主を信じ、神に心から抛り頼むことを学ぶ前は、起こる出来事、境遇に支配され、振り回され
る。環境や人のせいにし易い。

2. パウロも私達も、神ではないので、あらゆる境遇を自分の思い通りにコントロールする事はで
きない。人には、皆、辛い事や試練が起こる現実がある。しかし、人知を越えた神の計画、御
支配がある。

3. 「対処する秘訣」＝人生で最も大切な事は、思い煩って生きる事ではなく、自分に起こる出来
事、試練にどう対処するか、それらをどう受け止めるかである。私達は、起こる出来事をコン
トロールできない。しかし、その起こった事に、どう対処するか、どう受け止めるか、どう捉
えるかはコントロールできる。※ある本の励まし：「境遇を選ぶ事は出来ないが、生き方を選

ぶ事は出来る。神が私達を置かれた所は、辛い立場、理不尽、信じていた人の裏切り、病の中もあるでしょう。自分の思いと違う所に神が私達を置かれる事がある。その時も、そこで、神が与えられた賜物を生かして神の栄光を現わす花を咲かせましょう」。※証し。苦しい時、私達が、主を知らず主を信じていないなら、自分だけで、それらの試練、苦しみを受け留め、対処しなければならない。そうするなら、失望、落胆、恨み、憎しみ、あせり、性急な対処がやって来る。しかし、主を信じ、主が共にいて下さる私達は、自分一人ではなく、主と共に、人生の試練を受け留め、神の視点で、物事を見つめ直し、主と共に冷静に対処し、主から力をいただいて歩み続ける事ができる。試練、苦しみという境遇の中でも、主と共にそれらを受け留め、対処する時、その中でも、主の恵みがたくさん与えられていることに気づかされ、主の恵みを数え感謝する者、新しい事をされる神に信頼する者、満ち足りる者に変えられる。教会福音賛美歌409「救い主イエスと ともにゆく身は 乏しきことなく 恐れもあらし イエスは安きもて 心たらわせ(満ち足らせ) ものごとすべてを よきになしたもう ものごとすべてを よきになしたもう」

祈り：どんな境遇にあっても不平不満に支配されることなく、その境遇の中に神の支配を認め、神の恵みを数え感謝し、神が与えられたもので満足する事を学ばせて下さい。